

伊藤明生作 「受験てなあに？」

- 効果音 (終業のチャイム。ガヤ)
- 沢口和子 易子<sup>やすこ</sup>～！ 易子、待ってよ。(激しい息遣い) やっと追いついた。ねえ易子、ちょっと待ってよ。
- 有馬易子 入試間近の追い込みの時期なんだから、邪魔しないでよ。今日だって、帰ったら英語の単語 100 語、基本文型 50、数学の問題 10 問やらなきゃならないんだから。
- 和子 ちょっとでいいからさ、そんなに急がなくて。ねえ。
- 易子 だって、あたしお姉ちゃんに負けたくないだもん。和子知ってるでしょ？ お姉ちゃんは青春中学で 3 年間、1 番で通し、県下の名門校の青春高校に見事合格。そこでも優等生で名が知れてんのよ。あたしとお姉ちゃんとは 1 つ違いで、いつも競争相手だったわ。でも中学で、勉強ではお姉ちゃんに負けちゃった。陸上で語ったけど。だから、お姉ちゃんの学校に降格して、今度こそ勉強で絶対お姉ちゃんに勝ちたいのよ。
- 和子 でも易子はクリスチャンでしょ。そんな風にイエス様はあたしたちの能力で差別したりしないのは知ってるでしょ。
- 易子 (さえぎって) 何がクリスチャンよ。何がイエス様よ。この受験の追い上げの時に、そんなこと言ってられないわよ。より勉強して、より点を取ったほうの勝ちよ。イエス様は受験勉強の手助けなんかしてくれないじゃないの！
- 効果音 (易子が足早に立ち去る。)
- 和子(モノローグ) バカ、易子のバカ！ 人がせつかく心配して声をかけたのに。毎日、易子が希望のどこ入れるように祈ってたのに。フン、もういいわ。もう祈ってやんない。落ちればいいのよ、あんなの。
- ナレーション 有馬易子と沢口和子は、青春中学の 3 年生。私立高校に入試が始まり、県立高校の入試も目前に控えた 2 月のある日のことでした。その時、和子の心に、ふと 2 年前の夏のことが思い出されてきました。当時、同級生で大の仲良しの易子に誘われて、初めて教会の中学生のキャンプに行った和子は、心から感動して、その場でイエス様を救い主として信じたのです。和子と易子とは競って聖書を読み、ただの仲のいい友達ではなく、同じ神様を信じる信仰の友として、互いに励まし合い、祈り合って、ほかの友達にもイエス様のことを話したりしてきました。ところが易子は、3 年生になると、クラスも変わり、だんだん和子を避けるようになってきました。そして、夏休みも終わり秋になると、日曜日にも全然教会に姿を現さなくなりました。教会の牧師先生が訪問しても、和子が行ってみても、居留守がほとんどでした。
- 和子 易子、どうして、どうしてそんなに変わっちゃったの？ 易子のほうがあたしなんかよりずっと勉強できるのに。
- 渋谷悟 か、ず、こさん。
- 和子 ああ、渋谷先輩。
- ナレーション それは、教会の中学生会のリーダー、渋谷悟でした。
- 悟 そんな、怖いもんでも見たみたいに驚くなよ。
- 和子 だって、急に声をかけるんだもん。

悟 この寒い中、ボケっとしちゃって、一体どうしたんだよ。受験勉強で気が違ったのかと思うじゃないか。

和子 易子が…。

悟 易子さんがどうかしたの？

和子 易子が信仰捨てちゃったみたい。

悟 信仰を捨てた？ ずいぶん穏やかじゃないね。確かに、教会に最近来てないけど。

和子 ねえ先輩、わたしたちが信じて祈れば、イエス様は祈りにこたえてくれるんでしょ？

悟 うん、祈りはこたえられる。ただ、必ずしも僕らの思い通りに神様がしてくださると思ったら見当違いだろうけど、神様から見て最善のことをなしてくださるっての、ほんとだよ。

和子 それじゃ、受験勉強だと、どうですか？ 希望校に入れてくれるかしら、祈れば？

悟 うーん。難しい質問だなあ。例えば、和子さんが天下の名門校の中央高校に入りたいとする。そして学力の上では無理だとする。そしたら、どうする？

和子 そんなの、祈るしかないじゃない。

悟 勉強全然しないで、毎日毎日、何時間も何時間も祈るのかい？

和子 それはちと虫がよすぎるわね。でも、易子は教会にも行かないで、祈りもしないで、勉強ばっかりしてる。「イエスさまなんか受験の助けにならない。」とか言って。

悟 それも少しおかしいよね。信仰を捨てたともいえるね、確かに。菅原道真さんは受験の助けにはならないよね。せいぜい気休め程度だろうけど。イエス様を“受験の神”とか、“が苦悶の神”とかと同じように考えるのは間違っていると思う。

和子 どう違うの？

悟 菅原道真を祭ってある神社というのは、つまり、死んだ人間を神として祭っているわけで、神でない死人を拝んでいるんで、なんのご利益も効力もないよ。せいぜい縁起を担ぐようなもんだよ。僕らの信じてるイエス様ってのは、十字架にかかって僕らの罪を取り去ってくださった。それだけじゃない。この宇宙を創造し、今はよみがえって、この天地万物をご支配しておられるんだ。

和子 天地万物や天地創造の話もいいけど、受験は？ 受験はどうなるんですか？ ただひたすら勉強するだけでも、ただひたすら祈るだけでもダメじゃ、なんのなすすべもないじゃないですか。

悟 うん、ごめんごめん。話を受験のことに吹っ飛ばすと、クリスチャンとして受験をどう考えるか、だよな。クリスチャンにとって最大の目的は、自分の思いどおりにすべてが行くことではないでしょ。

和子 うん。“み心”が大事。

悟 そう、み心。つまり、神様の思われること、改革なさること、それが行われるように、ってことだよな。受験も同じだと思うんだ。ただひたすら自分の希望する学校に入るために勉強するってのは、しばしば神様のみ心より、自分の思いが中心になっちゃうんだ。

和子 じゃ、ひたすら祈ってんのがどうしてダメなんですか？

悟 それは和子さんが自分で言ってたじゃない。「虫がよすぎる」って。

和子 じゃ、どうすればいいの？

悟 受験ってのは僕らのためのものじゃなくて、神様のご栄光が現されるよう祈りつつ、神様のために僕らが闘ってんだよ。だから、「み心の学校に導いてください」と祈り、神様に信頼し

つつ、僕らのしなきゃならんこととして、受験勉強に励むのが一番いいんじゃないかと思うんだけど。

和子 ふーん。難しくてよく分かんないけど、とにかくあたしも頑張らなくっちゃ。帰って勉強しなくちゃ。

悟 そうだよ、頑張って。神様に信頼しながら。

和子 そうね。どうもありがとう。さようなら。(モノローグ)そうか、神様に信頼しながら…。うん。でも易子のこと、心配だなあ。

ナレーション 次の日曜日、教会で――。

悟 和子さん。

和子 ああ、先輩。この間はありがとう。

悟 いや、そんなのいいんだけど、易子さんが今日も来てないね。家で勉強してるのか。

和子 ううん。2、3 日前から、学校も休んでる。先生が言うには、風邪をこじらして寝込んでるんですって。

悟 そいつはいけないなあ。

和子 (小声で)フン、バチが当たったのよ。

悟 え、なんだって？

和子 信仰を捨てたバチよ。そう思いませんか？

悟 和子さん、それはないよ。和子さんの大切な友達だろ。彼女が君を教会に誘ってくれたんじゃないか。

和子 ……

悟 これから見舞いに行かないか？

和子 だって、「クリスチャンでも試験場では敵だ」って易子は言うのよ。

悟 イヤならいいよ。僕一人で行くから。

和子 あ、待って。あたしも行く。

和子 ごめんください。

易子の母 まあまあ、入試直前でお忙しいでしょうに。お見舞いにいらしていただいてありがとうございます。あの子はバカみたいに上の子とのライバル意識が強いもので、ほとんど夜も寝ないで勉強してるんですよ。もう精根尽き果てたといった感じで、とうとう寝込んでしまいました。あまり無理をして体を壊してはなんにもなりませんものね。易子、和子さんと渋谷さんがお見舞いに来てくれたわよ。(戸を開ける音)さあ、どうぞどうぞ。

悟 こんにちは。

和子 易子、どう？

易子の母 易子！ 顔を背けちゃって。せっかくお見舞いに来てくださったのに、失礼じゃない。

悟 あ、構いませんよ。

易子 (半ベソで)和子、この間はごめんね。せっかく心配してもらったのに。あたし、寝込んでやっとなかったのよ。あたしがムチャクチャに頑張っても、寝込んだら、体壊したらなんにもならないもん。布団の中でずーっと考えてたのよ。あたしって、自分中心だったなあって。あせって、自分の力でガムシヤラにやろうとして、神様を締め出してたみたい。

和子 ううん。あたしも間違ってたの。たいして勉強しないで、ただただひたすら神様に祈ってただけなんだもん。そして、易子のことを、内心バカにしてたんだもん。

ナレーション

二人は、心の中のわだかまりがずっと消えていくのを感じました。そして、イエス様のみ心が成るように祈りながら、二人でベストを尽くそうと誓い合ったのでした——。

<完>